

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 束縛的mustの語用論的・認知言語学的特徴づけと言 語学習との接点

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 英語法助動詞, モダリティ, 語用論, 認知言語学, 言語学習 キーワード (En): 作成者: 長友, 俊一郎 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/00006059">https://doi.org/10.18956/00006059</a>

## 束縛的 must の語用論的・認知言語学的特徴づけと言語学習との接点

長 友 俊一郎

### 要 旨

「モダリティ」は、様々な言語学の枠組みや概念に基づいて分析されてきた。R. Lakoff (1972a, 1972b) の研究は、語用論的観点から法助動詞の使用される微妙な文脈の違いを提示した先駆的研究である。Talmy (1988, 2000) の研究では、「力のダイナミクス」(force dynamics) の概念がモダリティ研究に導入され、認知言語学に立脚した法助動詞の研究に大きな影響を与えている。語用論・認知言語学でキーコンセプトとなるのが「コンテキスト」(context) である。コンテキストは、先行文脈、前提、捉え方、解釈、推論、認知などに相当する。

近年、語用論や認知言語学がいかにして言語学習、教授法、言語習得の分野に貢献できるかが論じられている。本稿では、語用論的・認知言語学的見地から、話し手はどのようなコンテキストで must を発話するのかを「英語学習者に英語の仕組みの骨格を提示し、英語学習が効率よく、かつ、効果的に進むのを支援するための英文法」(大津(編) 2012) を意識した形で提出する。

キーワード：英語法助動詞、モダリティ、語用論、認知言語学、言語学習

### 1. はじめに

1960年代以降、「モダリティ」(modality) は、様々な言語学の枠組みや概念に基づいて分析されてきた (Facchinetti, Krug, and Palmer eds. 2003, Salkie, Busuttil, and van der Auwera eds. 2009, Egan and Weatherson eds. 2011, Abraham and Leiss eds. 2012など)。Halliday (1970) は「体系文法」(Systematic Grammar) の立場から、「主観性」(subjectivity) の概念を用いて (モダリティを表す) 英語法助動詞の研究を行った。R. Lakoff (1972a, 1972b) の研究は、語用論的観点から法助動詞の使用される微妙な文脈の違いを提示した先駆的研究である。Talmy (1988, 2000) の研究では、「力のダイナミクス」(force dynamics) の概念がモダリティ研究に導入され、「認知言語学」(Cognitive Linguistics) に立脚した法助動詞の研究に大きな影響を与えている。

語用論・認知言語学でキーコンセプトとなるのが「コンテキスト」(context) である。Langacker は、言語表現 (の意味) の特徴をコンテキストの関わりで (1) のように述べている。

- (1) Remarkable, first, is the extent to which an expression's meaning depends on factors other than the situation described. On the one hand, it presupposes an elaborate **conceptual substrate**, including such matters as background knowledge and apprehension of the physical, social, and linguistic context. On the other hand, an expression imposes a particular **construal**, reflecting just one of the countless ways of conceiving and portraying the situation in question. Also remarkable is the extent to which **imaginative** abilities come into play.

(Langacker 2008: 4)

Mey (1993/2001<sup>2</sup>) は、コンテクストを (2) のように述べている。

- (2) コンテクストとは、コミュニケーションの過程において、コミュニケーションに参加している人たちが相互行為をすることを可能にし、その相互行為における言語表現を理解することを可能ならしめる環境、と解することができる。

(Mey 1993/2001 (澤田・高司 (訳) 1996: 53-54))

すなわち、コミュニケーションはコンテクストに基盤づけられており、コンテクストは、先行文脈、前提、捉え方、解釈、推論、認知などに相当する (澤田 2006, 長友 2009)。

近年、語用論や認知言語学がいかにして言語学習、教授法、言語習得の分野に貢献できるかが論じられている (Pütz, Niemeier, and Dirven 2001, Rose and Kasper eds. 2001, Bardovi-Harlig et al. eds. 2006, Boers and Lindstromberg eds. 2008, De knop and De Rycker eds. 2008, Robinson and Ellis eds. 2008, Soler and Martinez-Flor eds. 2008, Holme 2009, Littlemore 2009, Morón et al. eds. 2009, De Knop, Boers, and De Rycker eds. 2010, Tyler 2012, 大津 (編) 2012, 藤田他 (編) 2012, Reif 2012, Bielak and Pawlak 2013)。Tyler (2012) は、英語法助動詞に関する認知言語学的分析が第2言語習得に対して極めて重要な貢献をすることを論じた貴重な研究である。

岡田 (2001: 6-7, 2012: 119) は、英文法教育に対する立場として (3) を挙げている。

- (3) a. 科学文法 (生成文法、認知言語学、機能文法、語用論) などの成果を積極的に学校文法に取り入れ、今までばらばらに扱われてきた事実を統一的に説明する見通しの良い説明法を取り入れて新しい学習英文法を編集する。  
b. 英文法を指導する場合、形を公式的・機械的にひたすら暗記させるのではなく、意味や認知メカニズムから説明することにより、学習者を納得させる。

既存の学習文法書における法助動詞 must の記述は概ね以下のようなものであり、(1) - (3) の立場とは関連が薄い。

- (4) a. must も have to と同様に「…する必要がある、…しなければならない」を表します。  
(『マーフィーのケンブリッジ英文法』(中級編))
- b. must は「～しなければならない」という現在(あるいは未来)の義務や必要を表す。  
(『総合英語フォレスト』)
- c. 「必要である」ことを表現する場合に must が用いられます。  
(『オックスフォード実用英文法』)

以下、語用論的・認知言語学的見地から、話し手はどのようなコンテストで must を発話するのかを(3)に沿った形で明らかにしてみたい。

## 2. 基本概念

must によって表される(「義務」といった)束縛的モダリティには、「義務づけ」の行為の主体と客体が関与する。これは、Tregidgo (1982: 78) によって提示された must の意味構造によって明らかになる。(5)は、「XがYに対して[aがbする]という命題内容を引き起こすように要請する」というものである。

- (5)  $a \text{ must } b = X \text{ DEMAND } Y - Y \text{ CAUSE} - ab$   
(Tregidgo 1982: 78)

次の例を見られたい。

- (6) You *must* apologise at once!  
(Tregidgo 1982: 79)

(6)のXとYは、それぞれ、「話し手」と「聞き手」解することができる(Tregidgo 1982: 79)。

Talmyは、英語法助動詞は、力のダイナミクスという「認知システム」(cognitive systems)内の「構造的特徴」(structural properties)に関係するとしている。力のダイナミクスとは、力の行使、行使された力への抵抗、力に対する障害物、障害物の除去が織り成す関係である

(Talmy 2000: 409, Lakoff and Johnson 1980: 49, Kövecses 1986: 90, Johnson 1987: 42ff., etc.)。力のダイナミクスには、「主動子」(agonist) と「拮抗子」(antagonist) という概念が想定されている。前者は、おおよそ主語 (= TregidgoにおけるY) に相当し、後者は、「話し手」や「社会的圧力」のような、力を行使する、顕在的には言語化されていないもの (= TregidgoにおけるX) に相当する。Talmyは両者を、(7) のように特徴づけている。

- (7) a. 拮抗子は主動子に対立する力の「実体」(entity) である。  
 b. 主動子と拮抗子の2つの実体の本質的な傾向は、「活動」(action) に向かうか、「休止」(rest) に向かうかのどちらかである。  
 c. 2つの実体のうち1つは相対的に力の強いものとして表すことができる。

(Talmy 2000: 413-417)

たとえば、(8) において、

(8) John *must* not leave the house.

(cf. Talmy 2000: 441)

拮抗子は相対的に強い力を持つ「話し手」／「社会的圧力」と解することができ、主動子は活動に向かう「ジョン」である (Talmy 2000: 441)。

Johnson (1987: 51) は Talmy の提唱する力のダイナミクスの概念を援用し、*must* のイメージスキーマを、「強制のイメージスキーマ」(compulsion schema) と称し、(9) のように図示している。ここでの実線の矢印は直接的な力のベクトルを表し、 $F_1$  は Talmy の術語での拮抗子を表し、四角は主動子を表している。破線は、その主動子がたどらざるを得ない事象の実現への潜在的な道筋を表している。



たとえば、(6) の You must apologize at once! では、「話し手」が  $F_1$  に対応し、「あなた」が四角に対応する。また、実線の矢印は、話し手の聞き手に対する直接的な強い力を表し、破線の矢印は、すぐに謝る方向に向かわされる聞き手がたどらざるを得ない道筋を表している。

これらの概念を用いて「メンタル・スペース」(mental spaces) の概念を用いた束縛的 *must* の研究が行われている。メンタル・スペースは、思考が進むにつれ、次々に構築され

る局所的な認知領域であるとされる。

- (10) ...when we engage in any form of thought, typically mediated by language (for example, conversation, poetry, reading, story telling) , domains are set up, structured, and connected. The process is local: A multitude of such domains—mental spaces—are constructed for any stretch of thought, and language (grammar and lexicon) is a powerful means (but not the only one) of specifying or retrieving key aspect of this cognitive construction.

(Fauconnier 1994<sup>2</sup>: xxxvii)

Lampert and Lampert (2000: 247) は、メンタル・スペースの概念を用いて、mustを含む (11) の文には、2つのスペースの関与があることを (12) のように論じている。

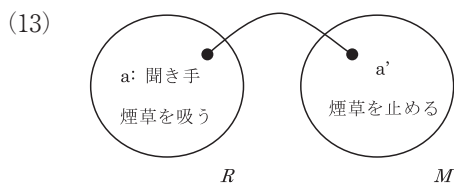
- (11) You *must* stop smoking in here.

(Lampert and Lampert 2000: 247)

- (12) ...in that [Reality/Base] Space an element **a** (*you*) [is] located which [and] is associated with the property ‘smokes’ (this element is identifiable as the Agonist of TALMY’s Force Dynamics configuration) ; and, finally, this element’s counterpart **a’** in the focus space M associates the property ‘stop smoking’ ... M turns out to be the focus space of this particular Mental Space constellation, with *must* evoking the relevant Force Schema, that is, Compulsion.

(Lampert and Lampert 2000: 247)

この分析の下で、(11) の促す「メンタル・スペース構成」(mental space configurations) (i.e.「結合」されたメンタル・スペース) を図示すると (13) のようになる。



ここでの円は、メンタル・スペースを表している。スペースR (eality) は現実スペースであり、「話し手の現実」(speaker's reality) が成立する (Fauconnier 1994<sup>2</sup>: 17)。スペースR内のaは、「聞き手」に対応する要素であり、このスペース内では、「煙草を吸う人物」という特徴をもつ。スペースM (ust) は、力のスキーマが喚起されたメンタル・スペースであり、その内部では、要素aに対応する要素a' は「煙草を止める」人物となっている。要素aと要素a' を結ぶコネクターは、双方が同一人物であることが表されている。

### 3. 束縛的mustの語用論的・認知言語学的特徴づけ

#### 3.1. mustの表出する強い力

mustには、Leech (2004<sup>3</sup>) が述べるような、「力の強さ」が関与する (Westney 1995: 167, Palmer1990<sup>2</sup>: 123, etc.)。

(14) For example, if someone says *You must buy some new shoes*, it is assumed that the purchase will be carried out: the tone of *must* tolerates little argument. But *You should buy some new shoes* is a different matter—the speaker here could well add in an undertone ‘but I don’t know whether you will or not’.

(Leech 2004<sup>3</sup>: 100-101)

事実、mustはshouldとは対照的に、話し手が聞き手に強く事象の実現を促す際に用いられる。(15)のように、mustは話し手が事象の実現を前提とする際に用いられる。

(15) You *must/should* do as he says, but you won't. (束縛的)

(cf. Palmer 1990<sup>2</sup>: 123, Westney 1995: 165, etc.)

#### 3.2. mustと好ましくない状況

mustに関与する力の強さに関して次のように捉えておきたい。

(16) 「X (=～しなければならない) さもないと Y (=好ましくない状況)」により、話し手は聞き手にXをするかYに見舞われるかの二者選択を迫り、強く事象の実現を迫るのは自然である。

(16) は (17) を予測するものである。

(17) a. should のような弱い力しか表さないモダリティ表現は好ましくない状況との共起が不自然である。

b. must は好ましくない状況と共起する。

(17a) は (18) によって支持される。

(18) You *must/??should* read Jane Austen or you won't feel better.

ここでは、下線部の「さもないと気分が良くなる」という好ましくない状況をもとに、Jane Austen を読むことが要請されているが、should の使用は不自然である。

(17b) に関しては、次のような事例が観察される。

(19) Radbuka sat with his lower lip sticking out, not even looking up to acknowledge the suggestion. When Morrell, with a grimace at the clock, said he'd drive him home, Radbuka refused at first to get up.

Max looked at him sternly. "*You must leave now, Mr. Radbuka, unless you wish to create a situation in which you would never be able to return here.*"

(S. Paretzky, *Total Recall*) (斜体・下線筆者)

(20) "Victoria, I don't care why you think this: it doesn't matter. What matters is my intensive care unit. I cannot have it turned into a war zone. *If someone may attack Chad Vishneski in my hospital, then you must move him somewhere else. Too many other lives are at stake.*"

(S. Paretzky, *Body Work*) (斜体・下線筆者)

(21) "Look," Lotty Said. "There are some shelters for women with children. I'll do my best to get you space in one of them. And I promise you I won't turn you over to the police. We'll use Vic's address for you—you can be their aunt, my dear—that should be appropriate for you."

"Touché, doctor. Fine." I turned to the woman. "I'll be your children's auntie. *But you must follow Dr. Herschel's advice. If your children die you will be bereft forever, you know, not just for the time they're in someone else's care.*"

(S. Paretzky, *Tunnel Vision*) (斜体・下線筆者)



(19) では、「さもないと、2度とこの家に入出入りできない状況を作り出すことになること」という好ましくない状況が述べられている。この状況をもとに、「帰っていただく」と述べられている。(20) では、「さもないと、あまりにも多くの命を危険にさらすことになる」という好ましくない状況をもとに、「チャドをどこかよそへ移してちょうだい」と発話されている。(21) では、「子供たちが死んだら、あなたは永遠に1人ぼっちである」という好ましくない状況をもとに、「ドクター・ハーシェルの指示には従ってね」と述べられている。

ここで、モダリティの表す力の強さに関して (22) もあわせて提示しておきたい。

(22) 話し手の要請する事象の実現に対して肯定的でない（可能性のある）聞き手を説得するためには、強い力の行使が必要とされる。

「許可」を表す can に関して考えてみたい。(23) が自然な表現であることから示唆されるように、「許可」を表す can には強い力の関与は無い。

(23) You *can* do as he says, but you won't. (can = 「許可的」)

次の例を考えてみよう。

(24) “No, no. You’re kind, you’re very kind, but I’m afraid I failed, and that’s that. It was just too much for me. I thought I was a bigger figure than I was. Can I tell you an embarrassing secret? Something I’ve never told anyone?”

“Of course you *can*.”

“I thought I was a genius. I actually used that word, privately, to myself.”

(M. Cunningham, *The Hours*) (斜体筆者)

(24) の can は、「きみが困惑するような秘密を話してもいいかい」と訪ねた聞き手に対して、話し手が発言を「容認」する際に用いられている。ここで重要なことは、聞き手が事象の実現に対して否定的な態度を示す人物ではなく、積極的な人物であることである。このような文脈では、聞き手を説得するための話し手による強い力の行使は必要とされないと考えられる。事実、ここでの can は強い力を表す must に置き換えることができない。

(25) Of course, you {*\*must/can*}. (コンテキスト = (24))

強い力を出す must を含む発話には、must で要請される事象に対して肯定的態度を示していない（可能性のある）聞き手の存在が看取される。すなわち、聞き手の否定的態度が must で表される束縛的モダリティ使用の基盤となっている。

(26) “Bertrand, enough of this history,” Fillida said in Italian. “Get her to tell you where the doctor is.”

“*Fillida, you must speak English,*” I said in English. “You’re in America now, and these two unfortunates can’t understand you.”

(S. Paretsky, *Total Recall*) (斜体・下線筆者)

(27) “Look,” I said, “I know this must be painful, and I know how you are—the last thing you want to do on the eve of your death is something noble—but the fact of the matter is, Caroline will be destroyed by your death if, as you die, she secretly wishes it. *If you really love her, you must make a present of her to your brother. You must bequeath her, while you’re still alive.*”

Dad didn’t say a word. As I made this appalling speech, I thought that if someone said this to me, I would probably stick a butter knife through his tongue.

“Leave me alone,” he said finally, in the dark.

(S. Toltz, *A Fraction of the Whole*) (斜体・下線筆者)

(26) では、イタリア語で話している聞き手のフィリーダに対して、話し手が「英語にしなさい」と述べている。(26) では、「つらいことは分かっている」として上で、「ほんとうに彼女を愛してるなら、弟に渡すべきだ。遺贈すべきだよ」と述べている。

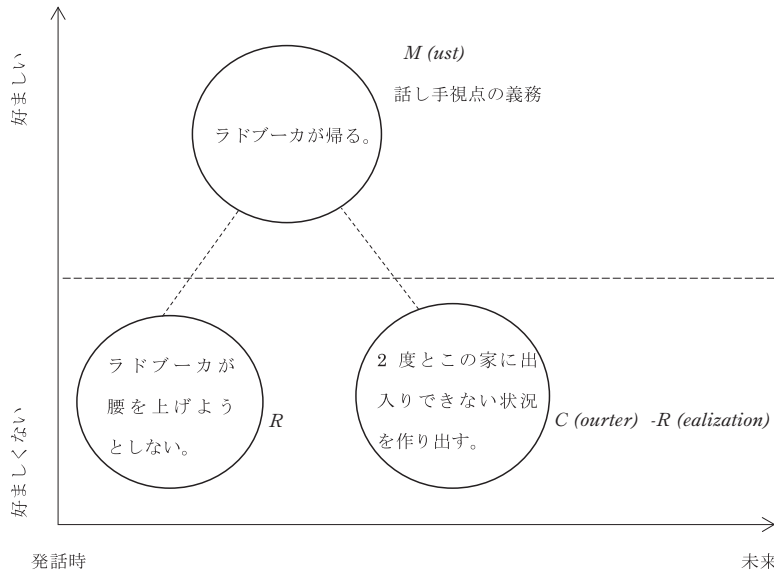
ここまでの議論を基に、好ましくない状況と聞き手の否定的態度が基盤となる must を含む発話のメンタル・スペース構築を (19) を例に取り提示してみたい。

(28) (= (19)) “You must leave now, Mr. Radbuka, unless you wish to create a situation in which you would never be able to return here.”

(S. Paretsky, *Total Recall*) (斜体・下線筆者)

ここでの斜字体の must を含む発話に関与するメンタル・スペースは (29) のように考えることができる。

(29)



現実空間Rでは、発話時における話し手の現実が成立する。ここでは、「ラドブーカが腰をあげようとしなさい」という現状が成立する。この状況は話し手にとっては好ましくない状況である。その状況をもとに、話し手は聞き手に「帰らなさい」と述べる。そのためM(ust)空間には「ラドブーカが帰る」という内容が成り立つ。この内容は話し手にとって好ましい状況である。C(ourter) -R(ealization)空間では、空間Mの内容が実現しない場合に成立する状況が成り立つ。ここでは、「2度とこの家に入りできない状況を作り出してしまおう」という好ましくない状況がそれに相当する。(29)のメンタル・空間構築は、(i)ラドブーカが腰をあげようとしなさいという好ましくない現状、(ii)すぐに帰らないと2度とこの家に入りできないという好ましくない状況を基盤として、話し手はYou must leave now.と述べていることを明らかにするものとなっている。

### 3.3. mustと好ましい状況

モダリティの力の強さに関して(30)も合わせて提示してみたい。

(30)「X(=～しなければならない) そうすればY(=聞き手にとって好ましい状況)」により、話し手はXとYを並列することにより、Yがとてもよいことなので、XをするとYという良いことがプラスされると述べている。「気遣い」を表明しつつ、強く聞き手に事象の実現を促すことは、聞き手の利益を考慮する発話においては自然である。

(30) は、(31) を予測する。

(31) a. had better のような「気遣い」とは関連の薄いモダリティ表現は好ましい状況との共起が不自然である。

b. must は好ましい状況と共起する。

まず、had better は本質的に「脅迫」(threat) を表す (Perkins 1983: 64, 柏野 2002: 160-162)。事実、良いことを相手に勧める時の「ぜひとも～しなさい」(=must) のような用法は had better には観察されない。

(32) Jane went with them to say goodbye, to hold the door and warn them to take care on the drive south. Jimmy Perez was the last to go. He seemed intrigued by the scene being played out in the common room and stood watching through the open door. It took Mary to call him away. There was a flurry of thanks. Mary shouted back to her: 'You *must* come and have dinner with us in Springfield before Jimmy and Fran go home!'

(A. Cleeves, *Blue Lightning*) (斜体筆者)

(32) では、must を用いて「ぜひとも食事に」と「勧誘」が行われているが、ここでの斜字体部の must は had better に置き換えることができない。

(33) You {*must*/\**had better*} come and have dinner with us in Springfield before Jimmy and Fran go home!

このように「気遣い」とは関連が薄い had better は聞き手にとって好ましい動機づけとは通例共起しない。

(34) You {*must*/\**had better*} read Jane Austen and you will feel better.

must は好ましい状況と共起する。

(35) Mrs. Humphrey begins to cry again, gently, effortlessly, as if the sobs are a kind of

birdsong.

“You must have some good woman friend you can go to. Or who can come to you.” Simon is anxious to transfer Mrs. Humphrey from his own shoulders to those of someone else. ...

A useful thought comes to Simon. “*You must eat something. You will feel stronger.*”

At this she smiles wanly at him. “There is nothing in the house to eat, Dr. Jordan. Your breakfast was the last of it. I have not eaten for two days...”

(M. Atwood, *Alias Grace*) (斜体・下線筆者)

- (36) The captain must have made another gesture because the guard stepped forward and took a leather sap from his rear pocket and struck Rawlins across the back of the head with it.

...

He got to his feet and faced the captain. He felt sick to his stomach.

*You must co-po-rate, said the captain. Then you don't have no troubles.* Turn around. Put down your pants.

(C. McCarthy, *All the Pretty Horses*) (斜体・下線筆者)

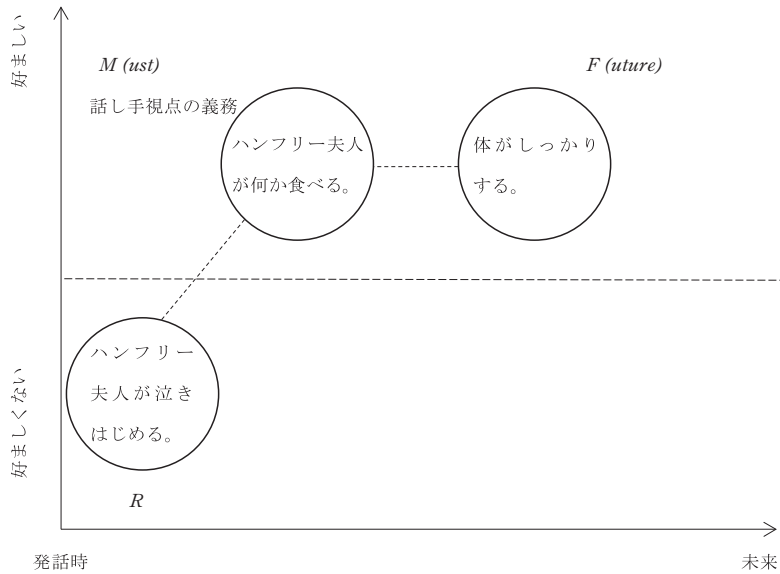
(35) では「そうすれば体がしっかりしますよ」という好ましい状況をもとに、「何か召し上がらなくてはなりません」と述べられており、(36) では、「そうすれば痛い目に合わなくてすむ」という状況をもとに、「素直に協力しろ」と述べられている。

(35) の事例における must を含む発話のメンタル・スペース構築は (38) のように考えることができる。

- (37) (= (35)) A useful thought comes to Simon. “*You must eat something. You will feel stronger.*”

(M. Atwood, *Alias Grace*) (斜体・下線筆者)

(38)



現実スペースでは、「ハンフリー夫人が泣き始める」という現状が成立する。この状況は話し手のジョーダンにとっては好ましくない状況である。これは「サイモンはハンフリー夫人を自分の肩から他者の肩へ早く移したい」という文脈から明らかである。「ハンフリー夫人が泣き始める」という現状を基盤としてジョーダンは聞き手ハンフリーに「何か召し上がる」ことを促す。この内容がスペースM(ust)に含まれる。F(uture)スペースでは、スペースMの内容が実現した場合に後続する未来の状況が成立する。ここでは、「体がしっかりする」という好ましい状況がそれに相当する。(38)は、(i) ハンフリー夫人が泣きはじめてしまっているという好ましくない状況、(ii) ハンフリー夫人の体がしっかりするという好ましい未来を基盤として、ジョーダンがハンフリー夫人に *You must eat something.* と述べていることを図示している。

### 3. 4. 束縛的 must とコンテキスト

次の事例を考えてみたい。斜字体部の促すメンタル・スペース構築は(40)のように考えられる。

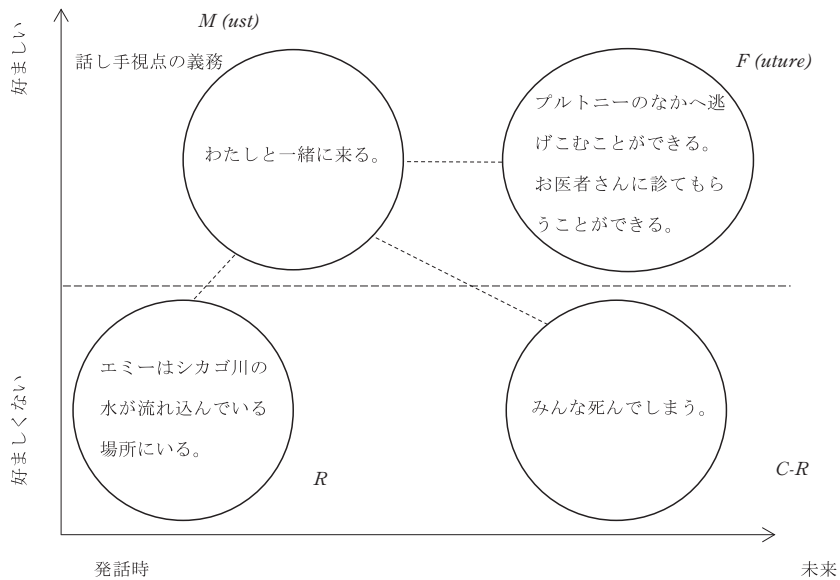
(39) “The Chicago River is pouring in here. The wall between the river and the tunnels broke last night. If you don’t get out now you may all drown. You certainly will starve: it will soon become impossible to get aboveground to find food. *You must come with me.* We’re going to have to go back through the water. We’ll be able to get into the

Pulteney and then we'll get you medical care. You must come with me. If you don't, you will all die."

Emily tugged wildly on my arm. "We can't go back. We can't go back! Tamar, don't let them take me back!"

(S. Paretsky, *Tunnel Vision*) (斜体・下線筆者)

(40)



ここでは、「エミー (=聞き手) はシカゴ川の水が流れ込んでいる場所にいる」という現状と、「プルトニーのなかへ逃げこむことができる」と「お医者さんに診てもらえる」という好ましい状況をもとに、「私と一緒に来なさい」と述べられている。次に、「さもないとみんな死んでしまう」という好ましくない状況を引き合いに出して、同様の発話が繰り返されている。(39) は、You must come with me. という発話が未来志向の好ましい状況と好ましくない状況の両者に由来するものであることを表している。

これまでの事例においては、未来志向的な好ましい状況と好ましくない状況への言及が must を含む発話に後続するものに限られていたが、must を含む発話に先行する場合もある。

(41) I stayed in the room, hoping Emily would feel I was keeping myself in connection with her. ... She was sobbing now into her hands.

I spoke to her directly, in a slow, loud voice. "Emily, you have to make a choice right now. There are four people in this room who want you to be well and happy. Do you

want to go on talking to me now about the night your mother died? Or do you want me to leave so that you can get some more rest? Whatever you decide to do, all four of us will respect your decision. No one will be angry or feel that you did something we didn't want you to do. But you must tell us what you want."

(S. Paretsky, *Tunnel Vision*) (斜体・下線筆者)

ここでは、「あなたがどちらを選んでも、わたしたち4人はその決定に従う」と聞き手にとって好ましい状況が提示された後に、You must tell us what you want. という発話が行われている。

ここまでの議論を (42) のようにまとめておきたい。

- (42) a. mustによって促される事象の実現に対して聞き手は現状において肯定的態度を示していないことを話し手は知っている。  
b. 話し手はその現状と未来に引き起こされることになる好ましくない状況、好ましい状況をもとに、「義務」や「必要」を表す発話を行う。

#### 4. おわりに

本研究では、主観的英語法助動詞 must の特徴を認知言語学的・語用論的観点から考察し、「英語学習者に英語の仕組みの骨格を提示し、英語学習が効率よく、かつ、効果的に進むのを支援するための英文法」(大津(編)2012)を意識した記述をおこなった。今回提示した(42)の特徴づけを提示した際の学習効果と従来の伝統的な学校文法での特徴づけを提示した際の学習効果の違いの実証的研究に関しては他日を期したい。

(43) を見られたい。

(43) Riche begins to gather More's papers from the table. ... More drops his hand on them, fingers spread; then shrugs, and yields them. 'Have them if you must. You read all I write.'

He says, 'Unless we hear soon of a change of heart, we must take away your pen and papers. And your books. I will send someone.'

More seems to shrink. He bites his lip. '*If you must take them, take them now.*'

(H. Mantel, *Wolf Hall*) (斜体・下線筆者)



斜字体部の More の発話は「伝聞タイプの条件文」(=if節の内容があらかじめ相手が主張したもの (Comrie 1982, Akatsuka 1986: 339, Declerck and Reed 2001: 84, Dancygier and Sweetser 2005: 88, 澤田 2006: 122-127, etc.) として特徴づけることができる。これは、as you say という表現が挿入可能／含意されることや (= (44))、If it is true that ...を用いて書き換え可能であること (= (45))、などから裏づけられる。

(44) If you must take them (*as you say*) , take them now.

(45) *If it is true that* you must take them, take them now.

すなわち、斜字体部の you must take them では、聞き手視点のモダリティが表されている。事実、But you are not under compulsion to do so. といった表現が後続可能である。

(46) If you must take them, take them now. *But you are not under compulsion to do so.*

さらに、このタイプの must は (「意志」や「能力」といった)「力動的モダリティ」(dynamic modality) を表すと考えるのが自然である。(43) における must は力動的モダリティを表す will と置き換え可能である。

(47) If you {*must/will*} take them, take them now.

よって、聞き手視点の力動的モダリティが関与する話し手にとっては望ましくないメンタル・スペースの関与があることが示唆される。話し手視点の主観的束縛的モダリティ以外を表す must の特徴づけならびに教育現場での応用に関しても今後の課題としたい。

\* 本研究は学術研究助成基金助成金 (基盤研究 (B) (2330100) ならびに基盤研究 (C) (25370565)) を受けたものである。

## 参考文献

- Abraham, W. and E. Leiss (eds.) 2012. *Modality and Theory of Mind Elements across Languages*. Berlin and New York: Walter De Gruyter.
- Akatsuka, N. 1986. Conditionals Are Discourse-bound. In Traugott, E. C., ter Meulen, A., Reilly, J. S. and Ferguson, C. A. (eds.) , *On Conditionals*, 333-351. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Bardovi-Harlig, K., C. Félix-brasdefer, and A. S. Omar (eds.) 2006. *Pragmatics and Language Learning: Conference Proceedings*. Hawaii: University of Hawaii Press.
- Bielak, J. and M. Pawlak. 2013. *Applying Cognitive Grammar in the Foreign Language Classroom*. New York: Springer.
- Boers, F. and S. Lindstromberg (eds.) 2008. *Cognitive Linguistic Approaches to Teaching Vocabulary and Phraseology*. Berlin: Mouton De Gruyter.
- Comrie, B. 1982. Future Time Reference in the Conditional Protasis. *Australian Journal of Linguistics* 2: 143-152.
- Egan, A and B. Weatherson (eds.) 2011. *Epistemic Modality*. Oxford: Oxford University Press.
- Dancygier, B. 1998. *Conditionals and Prediction: Time, Knowledge and Causation in Conditional Constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dancygier, B. and E. Sweetser 2005. *Mental Spaces in Grammar: Conditional Constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- De Knop, S. and T. De Rycker (eds.) 2008. *Cognitive Approaches to Pedagogical Grammar*. Berlin: Walter de Gruyter.
- De Knop, S, F. Boers, and A. De Rycker (eds.) 2010. *Fostering Language Teaching Efficiency through Cognitive Linguistics*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Declerck, R. and S. Reed 2001. *Conditionals: A Comprehensive Empirical Analysis*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Facchinetti, R., M. G. Krug, and F. Palmer (eds.) 2003. *Modality in Contemporary English*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Fauconnier, G. 1994<sup>2</sup>. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤田耕司・松本マサミ・児玉一宏・谷口一美(編) 2012.『最新言語理論を英語教育に活用する』東京：開拓社.
- Halliday, M. A. K. 1970. Functional Diversity in Language as Seen from a Consideration of Modality and Mood in English. *Foundations of Language* 6: 322-361.
- Holme, R. 2009. *Cognitive Linguistics and Language Teaching*. New York: Palgrave MacMillan.
- Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*.

- Chicago: University of Chicago Press.
- 柏野健次 2002. 『英語助動詞の語法』 東京：研究社.
- Kövecses, Z. 1986. *Metaphors of Anger, Pride, and Love: A Lexical Approach to the Structure of Concepts*. Philadelphia: John Benjamins.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, R. 1972a. Language in Context. *Language* 48: 907-927.
- Lakoff, R. 1972b. Pragmatics of Modality. *Papers from the 8<sup>th</sup> Regional Meeting Chicago Linguistic Society*. 229-246.
- Lampert, G. and M. Lampert. 2000. *The Conceptual Structure(s) of Modality: Essence and Ideologies*. Frankfurt an Main: Peter Lang.
- Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press. (山梨正明 監訳 2011. 『認知文法論序説』 研究社.)
- Leech, G. 1987<sup>2</sup>, 2004<sup>3</sup>. *Meaning and the English Verb*. Tokyo: Hituji Shobo / London: Longman.
- Littlemore, J. 2009. *Applying Cognitive Linguistics to Second Language Learning and Teaching*. New York: Palgrave MacMillan.
- Mey, J. 1993/2001 *Pragmatics: An introduction*. First/Second edition. Oxford: Blackwell. (澤田治美・高司 正夫訳 1996 『ことばは世界とどうかかわるか』 ひつじ書房.)
- Morón, R. G., M. P. Cruz, L. F. Amaya, and H. Lope (eds.) 2009. *Pragmatics Applied to Language Teaching and Learning*. Cambridge: Cambridge Scholars Publishing.
- 長友俊一郎 2009. 『束縛的モダリティと英語法助動詞』 東京：リーベル出版.
- 岡田伸夫 2001. 『英語教育と英文法の接点』 美誠社.
- 岡田伸夫 2012. 「学習英文法の内容と指導法」 大津由紀雄 (編) 『学習英文法を見直したい』 (106-119) 東京：開拓社.
- 大津由紀雄 (編) 2012. 『学習英文法を見直したい』 東京：開拓社.
- Palmer, F. R. 1990<sup>2</sup>. *Modality and the English Modals*. London: Longman
- Palmer, F. R. 2003. Modality in English: Theoretical, Descriptive and Typological Issues. In Facchinetti et al. (eds.) , *Modality in Contemporary English*. Berlin: Mouton de Gruyter. 1-20.
- Perkins, M. R. 1983. *Modal Expressions in English*. London: Frances Pinter.
- Pütz, M., S. Niemeier, and R. Dirven (eds.) 2001. *Applied Cognitive Linguistics I: Theory and Language Acquisition*. Berlin: Mouton De Gruyter.
- Robinson, P. and N. C. Ellis (eds.) 2008. *Handbook of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition*. New York: Routledge.
- Rose, K. R. and G. Kasper. (eds.) 2001. *Pragmatics in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Reif, M. 2011. *Making Progress Simpler?: Applying Cognitive Grammar to Tense-Aspect Teaching*.

- Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Salkie, R., P. Busuttil, and J. van der Auwera (eds.) 2009. *Modality in English: Theory and Description*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 澤田治美 2006. 『モダリティ』 東京：開拓社.
- Soler, E. A. and A. Martinez-Flor. (eds.) 2008 *Investigating Pragmatics in Foreign Language Learning, Teaching and Testing*. Bristol: Multilingual Matters.
- Sweetser, E. E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: University of Cambridge Press.
- 高見健一 2012. 「科学文法と学習英文法」 大津由紀雄（編）『学習英文法を見直したい』（194-205）開拓社.
- Talmy, L. 1988. Force Dynamics in Language and Cognition. *Cognitive Science* 12: 49-100.
- Talmy, L. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*, vol. 1: *Concept Structuring Systems*. Cambridge: MIT Press.
- Tregidgo, P. S. 1982. MUST and MAY: Demand and Permission. *Lingua* 56:75-92.
- Tyler, A. 2012. *Cognitive Linguistics and Second Language Learning*. New York: Routledge.
- Westney, P. 1995. *Modals and Periphrastics in English: An Investigation into the Semantic Correspondence Between Certain English Modal Verbs and Their Periphrastic Equivalents*. Tübingen: Niemeyer.

(ながとも・しゅんいちろう 国際言語学部准教授)